

教 仏 名 聞

第69号
(発行日)
2016年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

いのちより尊いもの

自分にとって何が一番大事であり、尊いものでしょうか。

こう問われると多くの人が「私のいのち」と応えるのではないのでしょうか。

お金が大事といい、健康が大事というけれど、それは「いのちあつてのものだね」であつて、いのちがやっぱ一番大事。だから、その次に大事なのは私のいのちをまもり、支えるところのお金や健康が大事だと。

健康とお金の外には子どもだとか、仕事だとか、夫や妻が大事など、他に大事なものはいくつもありましょう。その中でも「私のいのちが一番大事」であつて、それがなかったら、人生生活もいとまなまならず、仕事もできず、さまざま楽しめるも楽しめないといわれ、いわれるのでありましょう。多くの人はそう考えていると思います。

ところが真宗では「一番大事なもの」「根本的に尊いもの」を(ご本尊)といい、阿弥陀

如来様のことをいいます。

ご本尊というとお寺の仏像とか、お内仏の正面に懸けられていた阿弥陀如来様(絵像)をすぐ思います。また、あそこの寺のご本尊は国宝だということの場合のご本尊は仏像のことをさしています。

しかし、真宗でご本尊というのは、絵やお木像ではなくて、根本的に尊いおはたらきのことを「ご本尊」と申します。いわゆる阿弥陀如来様のおはたらきです。ただそのおはたらきを私たちが礼拝できるように造形化したのが、木像とか絵像の阿弥陀仏です。阿弥陀如来は、本質的には光明無量、寿命無量のおはたらきと説かれています。寿命無量とははかりなきいのちのはたらきです。

もとにもどつて、私たちが「一番大事なのは私のいのち」という場合の「いのち」とは何でしょうか。それは「身体としてのいのち」「肉体としてのいのち」のことでしょう。

それが一番大事であるといわれるのです。

けれどもその愛すべき、尊ぶべき、一番大事と思つて

いる「肉体としてのいのち」はやがて老化し、病気にもなり、ついには滅んでいきます。死ぬいのちです。いかに大事にしてもこのいのちは早晚ダメになつてしまひ、死んでしまいます。この(いのち)は私の努力によつて多少は延びるかもしれませんが、死なないようにすることはできません。日々、老化し死へと向かつていく(いのち)です。

もしもこの(いのち)しか私たちが知らないとしたら、一番大事なものである「私のいのち」は老衰し、しかばねとなつていくという悲しみや嘆きや憂いをまぬがれることはできません。

ところが、真宗の教えをお聞きしますと、(私のいのち)をして、いのちたらしめていく「はかりなきいのち」がましますことを知ります。すなわち寿命無量の阿弥陀如来様です。このはかりなきいのちは、決して私のこの肉体的ないのちを離れて一瞬も存在し

ません。むしろはかりなきいのちがあるから、それによつて(肉体的ないのち)もあるのです。はかりなきいのちは、今ここにおいてはたつきづめにはたらいっているのです。そのいのちは目に見ることも手つかむことも、あるいは思い計ることもできません。けれども、いちばん身近にはたらいっているのです。私の身体的ないのちは、このはかりなきいのちの海の上におかれていくようなものです。

こういう「はかりなきいのちの外に私のいのちはない」ということをほのかなながらも知らせて下さるお言葉が南無阿弥陀仏です。

南無阿弥陀仏を称え聞くことにおいて、私たちははかりなきいのちのはたらきであり、そのいのちこそ一番大事で、根本的に尊いおはたらきであることをほのかに知りまふ。このいのちにあつて、はじめて「私の肉体的ないのち」は安住の処を得しめられ、はかりなきいのちに帰らしていただけるという視野が開かれてまいります。こうして、このはかりなきいのちである阿弥陀如来様こそ、(私のいのち)よりも大事で尊いものであると知るでしょう。(了)

若くはふししょうじや

(和讃問答)

若くはふししょうじや

信楽まことときいたり

一念慶喜するひとは

往生かならずさだまりぬ

(讚阿弥陀仏偈和讃)

現代語意識（法蔵菩薩が「もし汝が浄土に生まれぬなら私は仏にならない」とまで誓いたもうたやるせなき大悲がましますゆえ、その大悲のお心が時節到来して私の上に信心として初めて起る時、「ああ有難い」と、阿弥陀仏の大悲を慶ぶ人は不思議にも浄土に生まれることが決定するのである）

○

N 「このご和讃の〈若くはふししょうじやのちかい〉とは何ですか」

D 「法蔵菩薩が私たちにかけて下さったお約束のことです」

N 「それはどこに表されているのですか」

D 「仏説無量寿経（大経）です」

N 「大経の中に、阿弥陀仏が私たちにかけて下さったお約束」

東が説かれていますのでね」

D 「ええ、それは阿弥陀仏に

なられる前に法蔵菩薩としてこの世に出現し、一切の衆生

を仏にしたい、助けたい、この上なき幸せな身にしてやり

たいという誓願（四十八願）をおこされました。この誓願

が成就して法蔵菩薩は阿弥陀仏になられたのです」

N 「では十八願の願文とは」

D 「それは

〈たとえ我仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、

わが国に生ぜんと欲いて、乃至十念せん、もし生ぜずは、

正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く〉

という願文です」

N 「この願文をやさしくおっしゃって下さい」

D 「法蔵菩薩が〈我が名を称えるばかりでタスケル〉とは」

D 「それは、十八願の文では〈乃至十念せん、もし生ぜず

は正覚を取らない〉という念仏往生の誓いであり、称えるばかりで助けるというお心です。いわば、まるまる助けるのお心です」

お心です」

N 「では〈信じて助かってくれよ〉とは」

D 「経文では

〈至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲いて〉

のお心で、〈念仏往生の誓いをまことと信じて浄土に生まれ

ることができると安心してくれよ〉という仏心です。まる

まる助けるといふ念仏往生の誓いをどうか信じて助かって

くれよとのお心です。信じてくれよ、信じさせたい、信ぜ

しめずにはおかない、というやるせない大悲のお心です」

N 「なぜ、信ぜしめずにはおかないとまで誓われるのですか」

D 「いかに、称えるばかりで助けると誓って下さり、まる

まる引き受けたもう阿弥陀仏の大悲のおはたらきがあつても、それを信じなかつたら、

大悲の力はその人に活性化し

ません」

N 「阿弥陀仏の大悲の仰せを信じなければ、阿弥陀仏のお助けは私の現実の救いにはな

らないのですね」

らないのですね」

D 「ええそうです。たとえば真つ暗な荒波に浮き沈みして

いる人がいて、それを助ける救助船が来て下さつて、〈その

まま助けるから、乗れよ〉と喚びかけて下さつても、その

船に乗らなければ、救助船はその人を救うことにはなりま

せん。ですから阿弥陀仏は、南無阿弥陀仏とまでなつて、

〈汝をそのままなりで助けるで、我が救いの船に、乗れよ〉

と喚んで下さるのです」

N 「南無阿弥陀仏の船に乗れよというのが、弥陀の救いを

信ぜよということなのです」

D 「ええそうです。信ぜよとは南無阿弥陀仏の南無のいわ

れで、マカセヨ、タノメの思し召しです」

N 「信ぜよとはタノメということなら、南無阿弥陀仏は〈タ

ノメと仰せ下さる阿弥陀仏〉という意味なのです」

D 「ええそうです。そこで宗祖はこのご和讃の〈若くはふししょうじやのちかい〉

に

〈わが誓いを信ぜん者、もしうまれずばほとけにならじと

いうところなり〉

と仰せ（左訓）られています。どこまでも本願を信ぜしめた

い、弥陀の誓いをたのましましたいとの、阿弥陀仏のお心で

す」

N 「信じさせて浄土に往生させようと誓われているのです

ね」

D 「ええ、そうです。お念仏の誓いを聞かせ、それを信じ

る信心まで与えて救おうとの阿弥陀仏の大悲のおまこと

です。阿弥陀仏のお力一つで助けようとされるのです」

N 「ということは、法蔵菩薩は

〈乃至十念せん、もし生ぜずは、正覚を取らじ〉

と誓つて、私たちのこのま

なりで助けたもう仏、すなわち南無阿弥陀仏になられて、

それを聞かせて下さるので

が、私たちはこの有難い誓いを信じないので

D 「ええ、万人を平等に浄土に至らしめる法はできあ

つても、それを衆生は信じるこ

とができないということ、それを如来法蔵様は知りぬ

いて下さつていて、どうか信じさせたい、信じせしめずには

おかないとまで誓われたお心を

〈至心に信樂して、もし生まれずば仏にならじ〉

と十八願に誓われたのです」

N 「お助けの法を信じる心まで与えようとされるのです」

D 「宗祖は、乃至十念の誓い

である（称えるばかりで助けらる）という誓いも有難いが、私がこの誓いを信じていることができたのは、如来法藏様が信ぜしめたい、信ぜしめずにはおかないとはたらきかけて下さる大悲の願力によつて信ずることができたのであつて、自分の力で信じたのではない、と願力を仰いでおられるのです」

N「その大悲のお力によつて、本願を信じて力のない私たちが本願を信じていることができるのですね」

D「ええ、（至心に信樂して、若し生まれずは、正覺を取らじ）の如来法藏様の誓いは、私たちに阿彌陀仏の絶対の救濟（念仏往生の誓い）を信受せしめずにはおかないとまで誓いでありますよ」

N「それをああ有難いと詠われたのがこのご和讃なのですね」

D「ええ、それで

若不生者のちかいゆえ

信樂まことときいたり

のお心は、このお助けの南無阿彌陀仏の行も南無阿彌陀仏を信じて信も、それを与えて救おうとの大悲の願心が、大悲の力となつて私たちに働きかけ、時が来て（ああそうであつたか）と受け入れる、そういう時がきます。それが（信樂まことときいたり）とお言葉です」

N「如来様の大悲の願心がとうとうほんまに届いて下さつた、ということですね」

D「ええそうです。そういう喜ばしい時ですね。阿彌陀仏に初めてであつた時です」

N「では、そういう願心が信心となつて私の心に届いて下さるには、私はどうしたらいいのですか」

D「どうしたらと云つて私たちがどうあがいてもだめです。私がどれほど自分だけで考えてもだめです。私たちにはその方法も道も分かりません。分かるはずがありません。しかし大変有難いことにそのお手立ては如来様が、（どうかして我が誓いを信ぜしめたい）とすでに五劫のご思案を下さつたのです」

N「私たちが阿彌陀仏のお助けをいただく思案はすでに如来様が考えて下さつたということですが、それはどのようなものでしょうか」

D「それは一言で言えば、南無阿彌陀仏の名声（名号）となつて私たちに喚びづめに喚んで下さり、南無阿彌陀仏の

大悲の願心を聞かせて下さることによつてです」

N「南無阿彌陀仏の大悲の願心を聞くことによつて、私たちに助けを信じて信心が起るのですね」

D「ええそうです。お勧め下さるお念仏を称え、そのお念仏の声に於いて、阿彌陀仏の大慈大悲の思し召しを聞くところに、大悲の心が私の心に至り届いて、私の上に阿彌陀仏のお助けを信じて信心となつて下さるのです」

N「では肝心の大悲の願心とはどういふのですか」

D「それはさきほどの第十八願の念仏往生の願の思し召しです。いわゆる

（乃至十念せん、もし生ぜずば正覺を取らじ）のお心であり、お力です」

N「（乃至十念せん、もし生ぜずば正覺を取らじ）とはどういふお心ですか」

D「（我が名を称えよ、助ける）との阿彌陀仏のお約束です」

N「我が名を称えよ、とは」

D「南無阿彌陀仏と称えるばかりで引き受ける、そのほかに何もいらぬ、汝をまるまる助ける、との仰せです」

N「大慈大悲に溢れた阿彌陀仏のお心なのですね」

D「ええ、そうです。正信偈

でいへば（極重悪人唯称仏）という阿彌陀仏の仰せです」

N「（極重悪人唯称仏）とは」

D「（極重の悪人なる汝、ただ仏の名を称えるばかりで仏にする）との思し召しです」

N「極重悪人とは、だれのことでですか」

D「私のこと、私たちのことです。阿彌陀仏からみそなわ

されている者である私たちは、仏様のおん眼には極悪人と見られて

います。私たちがどれほど自分で自分を反省しても

極悪人とは知れません。私たちの心の底の底まで阿彌陀仏

は知りぬいて下さつて、私たちに（汝、極重悪人よ、助

からぬ者よ）と仰せ下さるので

す。極重悪人という言葉は特別なだれかさんのことではな

くて、我執我愛の煩惱だらけの汝よということ。もう

一つ言えば、どうにもならない汝よということ。す

N「そうすると極重悪人とは煩惱の深いこの私のことなの

ですね」

D「ええ身についているのは我執・我愛の煩惱ばかりで

す。煩惱以外に身についていると思つて

はみな離れていきま

N「たえば」

D「お金も不動産も、子どもも孫も、つれいあひも、習つた英語や社会の知識も、運

転の仕方、パソコンの操作も、いや最後にはこの肉体もはぎ

とられていきます」

N「そうするとどこまでも残るのは何ですか」

D「煩惱の心です」

N「私の心、しかも煩惱の心だけが残つていくのですね」

D「欲とか怒りとか愚かさという煩惱の心が私の当体なので

す。この煩惱は私たちの力では除くことができないので

N「そういう煩惱が心に染みついていて除くことができない無能で粗悪な私たちにたい

して、阿彌陀仏は喚びかけておられるのですね」

D「ええ、煩惱しか無い私に

よりそつて、（汝、煩惱具足の悪人よ、そんなお前をこの阿

彌陀は引き受けて浄土に生まれさせる、安心してくれよ）

と仰せ下さるのです」

N「有難いですね」

D「ええ、如来様の大悲はこの（若不生者の誓い）の一句

は

るせない大悲心がこもっている一句なのですね。有難いです

D 「阿弥陀仏の誓いはまことに深厚です。江戸時代の終わりに出られた妙好人の三河のお園同行は、

〈若し生まれずば〉の〈若し〉はこの園がいわせました。というては落涙されたそうです。〈我が名を称えよ、もしそれで汝が浄土に生まれないうなら、この法蔵菩薩も仏にならず一緒に地獄に落ちてもよい〉の大悲窮まりないお心なのです

N 「ええ、このお心はいくたび聞いても有難いすね。なむあみだぶつ。そうすると〈至心に信樂して〉と仰せられ、どうか如来の救いを信じてくれよ、まかせてくれよ、我をたのんでくれよとまで仰せられるのですが、それと正信偈の〈極重悪人唯称仏〉のお心とどう関係がありますか」
D 「乃至十念せん、もし生まれずは、正覚を取らじ」の〈我が名を称えるばかりで助ける〉の思し召しが〈極重悪人唯称仏〉です。この大悲心を聞くところに不思議にも弥陀をたのむ信心が起こり、弥陀のお助けに疑いがなくな

るのです

N 「不思議すね」

D 「ええですから、信心は凡夫の私たちが起こす心でもないし、實際起こし得ないですね。にもかかわらず、この煩惱だらけの私たちの心に妨げられずに、無碍の大悲心は届いて下さり、私たちの信心となつて下さるのです。それは如来様の大悲の心を聞かせていただくことによつてです」

N 「ではその大悲心はどこで聞くのですか」

D 「私たちの念仏の声とまなつて称えさせ、名号を聞かせて下さるのです。その名号のお心を善知識より聞かせていただくことによつてです」

N 「そうすると念仏を称え、お念仏を耳に聞き、そのお念仏の心を仏法の師からお聞かせいただく。それによつてなのですね」

D 「ええ、そうです。そういう道をつけて下さったのもみな阿弥陀仏のおはからいです。それは弥陀の本願の第十七願にしめされています」

N 「第十七願のお働きによつて、私たちは念仏を申し、お念仏を聞き、南無阿弥陀仏のいわれを仏法の師からお聞かせていただくのですね」

D 「ええそうです。耳にお念仏の声となつて聞かしめられる南無阿弥陀仏がいかに大悲に満ちた仏の思し召しであるかを、説法をお聞きすることによつて知るのです。そして感じるのです」

N 「ではこのご和讃の後半に〈一念慶喜(まこと)は往生かならざるまじりぬ〉のお心をお話し下さい」

D 「一念慶喜とは、如来様の〈まるまるのお助け〉を聞いて〈ああ有り難い〉と初めて慶ぶことです。一念は、初めて起こる信心のことです」

N 「阿弥陀仏のお心が私の心に届くといわれますが、それはなぜ届くのですか」

D 「それは不思議なことです。阿弥陀仏のお心には無碍光のお徳があり、私たちの煩惱がどれほど深く濁つていても、それに碍りなく、邪魔されずに貫徹し届いて下さるのです。もし無碍光のお徳がなければ煩惱だらけの私はお助けに出来ないです」

N 「大悲心が我が心に来て下さるから、ああ有難いと慶ぶことができるのです。煩惱だけの心では到底不可能ですね」

D 「ええ、大悲の本願のお心が与えられないと阿弥陀仏の

お助けを慶ぶなどと云うことは到底できません。本願を一念慶ぶ心も阿弥陀仏からたまわるのです。しかもひとたび届いて下されば、もう二度と離れることはありません。本

当に不思議です」
N 「そういう人は〈往生かならずさだまりぬ〉なのですね」

D 「ええ、浄土に生まれることが決定するとの仰せです。浄土に生まれるのはこの世で決定するのです。死ぬ時に決定するではありません。死ぬ間に決定することはもちろんありましようが。死ぬ間際であろうと尋常であろうと、

〈若不生者〉の十八願の誓いを信じる、その時に浄土に生まれることが定まるのです」
(了)

〈遠方法話予定〉

- *六月四日。福井別院。午前十時法話・午後座談
- *七月五日。名古屋別院。午前十時法話・午後座談
- *七月九日。福井別院。午前十時法話・午後座談
- *七月十四日～十五日。石川県鳳珠郡穴水町。法琳寺。午後より午後まで。
- *九月十日。福井別院。午前十時法話・午後座談
- *十月十三日～十五日。福井別院。朝事後法話と午後法話・座談
- 宿泊可(〒〇七七六・二一・四四四四)
- *十月十九日。名古屋市中川区。坪井氏宅。午前十時法話・午後座談
- *十月二十三日～二十五日。札幌別院。
- *十一月二十三日から二十四日。石川県金沢市。名聲寺。午後から午後まで。
- *十二月十日から十一日。姫路市。西源寺。夜から午後まで。
- *十二月十七日。福井別院。午前十時法話・午後座談。

○詳しくは念仏寺にお尋ね下さい。



《盂蘭盆会法要》

八月十日(水)

午後二時始まり

* * *

- *法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
- *八月十二日と八月二十二日の法座はありません。
- *八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。